『彼方で君を待つ』

「……君は誰？」

　夕暮れ時。茜色に染まった教室で見知らぬ少女に訊ねた。

　俺が在籍していた高校のセーラー服に身を包んだ少女はこちらに手を差し出す。

　彼女は一体何者で、ここはどこなのだろう。そして、俺はなぜここにいるのだろう。

　少女の見た目から察するにここは俺が在籍していた高校。しかし、同級生にこんな子、いただろうか。教卓の横にマグネットで張り付いている大きめの三角定規。校訓の書かれた額が時計の隣に並んで俺を見下している。

　懐かしい場所だ。かつて俺が生きた場所。将来の苦しいが安定した未来を何も知らなかった幼い俺が生きた場所。

俺は既に卒業しているのに、なぜ高校の制服を着て、この場に居るのだろう。全く状況がつかめない。

「君は誰なの？」

「……やっぱり、覚えていないんだね」

　彼女は残念そうに呟くと、顔を上げて「あなたの名前は？」と訊ねてきた。

　名前。そうだ俺の名前はなんだったっけ。

「そう。あなたも分からないのね」

「あなた〝も〟？」

「そうよ。私も分からないの。ようは名無しの権兵衛同士。仲良くしましょう」

　こちらを向いて、微笑みかけてくれる。

　どこか懐かしい雰囲気を感じるのにその正体が掴めない。

　俺はその衝動に従って、彼女の顔をじっと見つめる。やはり、何も思い出せない。

　彼女はそれまで座っていた窓際の席から離れて、黒板にチョークで何かを書いていく。

　佐藤、鈴木、山本、伊藤、松本。どれも馴染みのある名字ばかりだ。

　俺が呆けて眺めていると彼女は、更に名字を書いていく。

　新城、武藤、松村、白石、桜井、斎藤。あまり馴染みの無い名字も書かれていく。

「どれか気に入ったのはある？」

　それ、俺が答えるのか。

「言ってくれないなら、次の候補を書くよ」

　悠木、緑川、宮野、工藤、篠原、中森、榊原。まだまだ増えていく。

「榊原だ」

　最後に書かれた名前がどうにも気になってその名前を選んだ。

「じゃあ、君は榊原くんね」

「俺の名前だったんだ……」確かに名無しの権兵衛のままでは困るけど、自分の名前を決めているのならもっと真剣に考えればよかった。

「次は私。どれがいい？」

　イメージでいうなら、桜井とかどうだろう。でも、彼女だったら――。

　ふと、脳裏に一瞬だけイメージ映像のようなものが流れ込んできた。

　映像にしても画質が粗くて話にならないが、そこに映っていた女の子の名前は――。

「佐藤……とかは？」

「じゃあ、私は佐藤さんね」

　彼女は佐藤さんになった。そんなに適当でいいの、と訊きたくなる。

「次は下の名前を決めましょう」

「まだ続けるんだ……」

　その後も続けたこの遊びの結果、俺の名前は榊原悠人。彼女の名前は佐藤晴香になった。さっきまで名無しの権兵衛だったせいで、凄い違和感だけど、同時に懐かしい感じのする名前だ。

「もう満足したか？」

「佐藤……晴香……。うん、良い名前」

　彼女、佐藤さんは俺の問いには答えずに自分でつけた名前を何度も頻りに繰り返している。

「榊原くん。思い出せた？」

「なにを？」彼女の問いの意味が分からないで訊き返してしまう。

「……そろそろ時間だから、急がないと」

　そう言って彼女は黒板前から離れて、こちらに近づいて来る。

「自分で思い出してもらわないと意味が無いんだけど。今回だけは特例」

　そう言って彼女が俺の額を小突く。

　その瞬間に俺の頭の中に大量の記憶が、俺の出生から死に至るまでのすべてが、まるで走馬灯のように流れ込んでくる。

「思い出してくれた？」

「思い……出した……」どうして、今まで忘れていたんだ。俺は彼女を、佐藤さんを――。

「少し、昔話に付き合ってもらっても良いかな？」

　俺は首を縦にも横にも振らない。

「……私ね、高校生のときに好きな人がいたの」

　そう言いながら窓に手を添える。しかし、その手はまるで塵のように消え始めている。

「でもね、その人。私に興味なかったの」

「……冗談言うなよ」彼女はクラスの人気者だった。男子生徒は言うに及ばず、女子生徒にだって人気があった。彼女とお近づきになりたいという人は吐いて捨てるほどいたのを覚えている。俺だってその一人だった。

「冗談じゃないよ。みんな、興味があるのは私の外見だけ。それ以上にもそれ以外にも興味は無かったよ」

　そうだった。誰も佐藤さんのことを見てはいなかった。それに彼女も見せないように努力をしていた。

　俺は彼女のそんな姿を見たくなくて、興味の無いふりをしていた。

「でもね、一人だけ私を見てくれない人がいてね。まあ、ふりなのはわかったんだけど、何となく気になっちゃって。ストーカーみたいなことをしちゃった」ごめんねと続ける。

「それでね、その人を見ていたら、その人、誰の目も気にしてなかったの。私とは大違い」

　彼女はいつも人の目を気にしていた。彼女は俺の知っている限り、彼女の為の佐藤さんは一秒だって存在しなかった。誰かの為の佐藤さんばかりだった。

「そんなんだったから、君は自殺したの？」俺は彼女に死の真相を訊ねる。

「違うと思うよ。うん、きっと違う」

　彼女はいつだってそうだ。独りで勝手に納得してしまう。

　もっと馬鹿の俺にでもわかるように話して欲しい。

「ただ、なんとなくで死んじゃった。その瞬間だけでも私は私として、私らしくありたい。そう思ってね」

　そんな理由で人は死ねるんだ……。

「私だけだよ。そんなどうでも良い理由で死んじゃうのは」だから君は気にしなくても良いと言っているようだった。

　しっかりと俺の目を見て、陽気でお茶らけているような声でも真剣に。

「死んだ後、私はここに居た。ここには一人だけ女性がいて、その人から死んだことを教えられて、自分の葬式を見てきたわ」

「……どうだった？」

「あ、そうか。君は参列してなかったよね。お通夜にもお葬式にも」

　俺は、単純に彼女が死んだことが受け入れられなくて、行かなかった。彼女が死んだことを認めたくなかった。

「嬉しかったよ。あの連中は通過儀礼として来ているだけだから」

　涙は本物だったと思うよ。

「すぐに忘れるよ。人はどんなに痛いこともすぐに慣れて、忘れる」

　そうだ。彼女の死を悼んでいたのはわずかに一週間くらいだった。明確にその雰囲気があったのはそれだけだった。本当はもっと短かったかもしれない。

「それでね。葬式の時に君がいなくて、門番の人からこの後どうするかって訊かれたの」

　天国へ逝って再生を待つか。永遠に現世を彷徨うか。地獄へ落ちて他人を恨み続けるか。

「ここに残ることを選んだ。ここで君を待つことを選んだ」

「そうだったんだ」俺は彼女をこんな場所に六十年近くも放置していたんだ。

　ごめんなさい。

　そして、こんな俺のことを待っていてくれてありがとう。

　ありがとう。その一言が俺の口から出てきたと同時に、教室を形作っていた世界がまるで零れ落ちていく砂の様に壊れ始めた。

「時間だね」

　俺が着ていた制服が白い長襦袢に変わっていく。

「ど、どうなっているんだ⁉」

　辺りの景色が学校から神社の入り口のような場所に変わる。

「……ここは？」

「ここはあの世とこの世の狭間、そして過去と未来の狭間でもある」

　黒い着物に黒のロングコートという和洋折衷な姿で現れたのは先ほどまで俺と話していたはずの佐藤さんだ。

「さっきまで私たちが居たのは、あなたの後悔を清算するのに相応しいとされた場所。そして、その懺悔に最も相応しい状態で私たちはあの場所に居た。それがここの仕組み」

　雰囲気がまるで違う。とても冷たい感じがする。本当に同一人物なのだろうか。

「さあ、あなたも選ぶべきときよ。この鳥居を潜れば、あなたは天国へと逝ける。その階段を降りたならば地獄へ。こちらの扉を潜った先には現世がある。どれか一つをあなたは選ぶの」

　先ほどまで無かった門まで現れた。

「あの日、俺は全てから目を背けた」受け入れたくなかったことから逃げていた。

　今、鳥居を抜けても階段を降りても。まして扉を潜ったところで俺はまた逃げることになる。

　だからこそ、もう逃げない。

「俺は、ここに残る。今度は君が来るのを待ち続けるよ」

「正気？　辛い道だよ」

　さっきまで指先だけだった消滅が足先にも伝染している。

「それでも良いよ。君がここで六十年以上も待ってくれたんだから。何十年、何百年と待とうが平気だよ」

　笑って答えられる。だから、俺はまだ自分でいられる。

「わかった。じゃあ、お願いね」

　その言葉と一緒に鐘の音が響く。

「ああ……鐘の音が聞こえる……」

　彼女の着ていた黒い着物は白い襦袢に変わり、俺の着ている襦袢が黒いロングコートのような服に変わる。

「神託は告げられたわ。これよりあなたはこの場所で門番をしてもらうことになります」

　最初の仕事は私だね。と砕けた口調で告げる。

「榊原くん。じゃあ、またね」

　彼女は手を振る。

「天国への道が現れました」地獄へ続く階段と現世へと向かう扉が消える。

　彼女は頷いて鳥居の方へ歩いていく。

「また、会えるかな？」

　天国へと赴いた魂はそれまでの記憶を忘れる。来世において新生するときにはそれまでの記憶を持ってはいけない。だから、彼女が俺を覚えていることはあり得ない。

「きっと会えるよ」彼女が死んだときに出迎えるのは俺だろう。そうでありたい。

　彼女もこの場所で長いこと案内人をしていたんだ。特性は十分に理解しているだろう。

そのうえで何を語るでもなく、鳥居の方へと歩んでいった。

　鳥居を潜り終えたことにより、一帯が闇に包まれる。

「さて、永い仕事が始まったな」

　教室の椅子に座っていたとはいえどあれから立ちっぱなしだったので、疲れを落とすために近くの縁石に座る。

「いつかの未来を俺は手に入れてみせる」

　気合を入れ直したと同時に鐘の音が響く。

　どうやらこの鐘の音は基本的に死者の来訪を告げるのだろう。

　そういえば、佐藤さんは神託だといっていた。

　ならばここの運営は神様のなのだろうか。

「あの～、ここは一体……」

　会社員のような格好をした男性が鞄を抱えて不安そうな様子で俺に声を掛ける。

「ここは、あの世とこの世、同時に過去と未来の狭間でもあります。あなたは既に死を迎え、これより三つの道を選ぶことになります。その前に――」

　周囲の光景が男性の心象風景に変わる。

　そこは、都会の道中。おそらく勤め先の会社が入っているビルの前。

　ここがこの人の後悔が残る場所か。

　俺の時と同様に世界が形作られている。

　しかし、この場に向かう太陽も巧妙に造られたレプリカであって、光は感じるが熱を感じない。俺自身は先ほどまでの黒いロングコートだというのに熱を感じない。

　死人だから当然と言えば当然なのに、不思議な感じだ。

　まあ、俺以上に困惑している人がいるから俺も比較的冷静でいられる。

　そろそろ仕事を始めるとしよう。

「さあ、この場所で、あなたの後悔を清算します」